

# 百鬼夜行

Natsuhiko Kyōgoku

京極夏彦

妖怪小説

- 小袖の手
- 文車妖妃
- 目目連
- 鬼一口
- 煙々羅
- 情兮女
- 火間虫入道
- 襟立衣
- 毛倡妓
- 川赤子

陰



N.D.C.913 374p 18cm

百鬼夜行ひやくまき やまよ——陰いん

一九九九年七月一日 第一刷発行

KODANSHA NOVELS

定価はカバーに  
表示してあります

著者—京極夏彦きょうごく なつひこ

© NATSUHIKO KYOGOKU 1999 Printed in Japan

発行者—野間佐和子

発行所—株式会社講談社



東京都文京区音羽二丁目二二番一  
郵便番号一〇一八〇〇一

編集部〇三三五三九五―三五〇六  
販売部〇三三五三九五―三六二六  
製作部〇三三五三九五―三六一五

印刷所—廣濟堂印刷株式会社 製本所—株式会社堅省堂

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部にてお送りください。送料小社負担にてお取替え致します。  
なお、この本についてのお問い合わせは文芸図書第三出版部にてお願い致します。  
本書の無断複写（コピー）は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

¥780-

ISBN4-06-182080-X (文三)

# 百鬼夜行

京極夏彦  
Natsuhiko Kyogoku

陰

妖怪小説

- 小袖の手
- 文車妖妃
- 目目連
- 鬼一口
- 煙々羅
- 情兮女
- 火間虫入道
- 襟立衣
- 毛倡妓
- 川赤子

院图书馆  
章



ISBN4-06-182080-X

C0293 ¥980E (0)



1920293009803

百鬼夜行—**陰**

京極夏彦

定価：本体980円(税別)

揺るぎ無いはずの「日常」が乱れる時、人は心の奥に潜む「闇」と直面する。精神の内から湧き出る「妖怪」という名の怪異。他人の視線を異常に畏れる者。種に格別の執着心を持つ火消し。笑うことができない峻厳なる女教師。海に強い嫌悪感を抱く私小説作家。人が出合う「恐怖」の形を多様に描き出す十の怪異譚。

兇夜行  
—  
陰

榎夏彦

ODANSHA  
講談社  
ノベルス  
NOVELS

ブックデザイン||熊谷博人  
カバーデザイン||辰巳四郎  
扉イラスト||京極夏彦





陰



第一夜

小袖  
こそでの  
手





小袖の手

唐詩に  
 昨日施レ僧裙帶上断腸猶繫二琵琶絃一とハ  
 僧に供養せしうかれめの帯に、  
 なを琵琶の糸のかゝりてありしを見て、  
 腸をたちてかなしめる心也  
 すべて女ははかなき衣服調度に心をとめて、  
 なき跡の小袖より手の出しを  
 まのあたり見し人ありと云

杉浦隆夫は簞笥に仕舞つてある妻の着物を凡て処分することにした。

もう妻が戻ることもあるまいし、仕立て直して再利用することも考え難かつたから、殆ど躊躇うこともなかつた。ただ、抽匣を開けると云う行為自体には大層抵抗があつて、杉浦はその刹那、恐怖のあまり指先の力が抜けて、取っ手の金具をかたかたと鳴らしてしまつたのだつた。

そのかたかた云う音が。

杉浦の恐怖心を一層逆撫でした。

——馬鹿馬鹿しい。

本当に馬鹿馬鹿しいと思つたから、杉浦は勢い良く抽匣を開けた。

着物は畳まれ、帖紙に包まれて実に丁寧に仕舞われていた。思い返せば妻は必要以上に几帳面な女だつたのだ。杉浦はそんなことすらすっかり忘れていたようだつた。

いずれにしても——。

着物が剝き出しになつていなかったお蔭で、杉浦の不条理な恐怖心はやや鎮静化した。

そつと紙を捲つてみる。

見慣れた柄が覗いて、胸の奥が少しだけ痛んだ。大した数ではないが、一枚一枚に過ぎ去つた時間の残り香があるような、そんな錯覚を覚えた。

——これは慥か。

妻があ頃善く着ていた——。

懐かしい、臃げな記憶を辿る。

あの頃——。

漠然とあの頃などと思うのだけれど、それが果たして何時のことなのか、杉浦にはまるで思い出せていない。

物論妻が着ていたものに間違いはないのだが、それは甚だしい加減な記憶であり、だいいち杉浦にはそれが春物なのか夏物なのかさえ区別がついていなかった。

ただ、妻には十二分に未練があつた。

その妻の残した品なのだから、それを手にして幾許かの感傷が湧くのは当然と云えば当然だろう。

しかし、それにしたつて着物の一枚一枚に対して大袈裟な思ひ出がある筈もなかったのだ。そもそも杉浦が妻と過ごした時間は豪く短かつたのである。

だからその胸の痛みにしても、本当のところは妻との記憶の残滓なのか、久方振りに吸い込んだ微かな樟脳の刺激臭の所為なのか、それすらも定かではなかつた。それは寧ろ、喪失感に近い感情なのかもしれないなかつた。

質屋にでも持つて行けば幾価かにはなるのだろうか、虫が食っていることもないだろうから、欲しがる者もいるかもしれない。

だが金に換えると云うのも何だか厭だつたし、他人に袖を通させるのは何となく妻に悪いような気がした。

——袖を通す。

その言葉が再びの恐怖を喚起した。

そう声に出して云つた訳でもないし、心中明確にその語句を想起した訳でもないのだが、着物の袖から白い手がぬう、と伸びている情景だけが鮮烈に脳裏に浮かんで、気がつくと杉浦はわあと声を上げ、手にしたそれを畳の上に放り出していた。

慌てて抽匣を閉じる。

畳の上に一枚だけ着物が残つた。

暫くそうして、それから少し笑つた。

冷静になれば一連の杉浦の行動は実に無意味で、そのうえ滑稽だつたからである。箆笥だの着物だのそんなものが怖い道理はどこにもない。そんなことは充分解っている。解つてはいるが——。

矢張り着物は凡て捨てようと思つた。

もう厭——。

だったろうか。

それとも、

もううんざり——。

だったかもしれぬ。

妻が最後に発した言葉である。

杉浦は思い出している。

妻が家を出てからもう半年は経っている。その、最後の言葉を聞いたのはそれより更に数箇月も前のことだ。会話をした記憶となると更に遠い。

その頃、杉浦と妻の關係は完全に破綻していた。

家を出るに至った妻の気持ちなど、所詮杉浦などに解る訳もない。だが想像するのは簡単だった。

人としての義務をすっかり放棄して、日日廢人のように無為に過ごしていた後ろ向きな杉浦が、常に前向きだった妻には我慢ならなかったのだろう。

去年の夏まで杉浦は小学校の教員だった。

結婚したのは矢張り去年の春だったから、所帯を持ってから杉浦が社会人としてまともに就労した期間というのは、精精一二箇月と云ったところだっただろう。教師を辞めてからと云うもの、杉浦は妻を含むあらゆるものを拒み、拗ねるように、頑なに何もせずに過ごしたのだ。

そうして考えてみると——そんな男との暮しは常人ならば耐え切れまい。厭にもなろうと思う。こうなったのは寧ろ当たり前前で、何の不思議もないことなのだ。

杉浦は庭に目を遣る。

妻の言葉が甦る。

貴方が解らない——。

——解らないだろうな。

職を辞するにあたって、杉浦には例えば切迫した事情があった訳でも、所謂いわゆる一身上の都合などがあつた訳でもない。かと云つて教育者としての自信を喪失したとか、現在の教育制度に絶望したとか、そんな大仰おおげさな大義名分があつた訳でもなかつた。

それは実に朦朧ぼんやりとした、あつて罔なきが如き理由なのだった。

ある日突然。

子供が怖こわくなつたのだ。

それまで杉浦は、聖職者として然さしたる理想を掲げることもなく、かと云つて義務を放棄するような無頼教師むらいでもなく、云つてみればただ為なすがままの職業教師だった。それが生業なりわいなのだから己おのれを得ないと、ただだからだとそう思つていた。子供が好きと云う訳でもなかつたが、接してみれば彼等も意外につき合あひ易やすく、だから仕事もそれなりに熟こなせた。子供と云うのは煩瑣わづらいけれど可愛いものだ——結局そのぐらゐには思えるようになっていたのだった。

そんな杉浦は生徒達に對して厳格な管理者とはなり得なかつた。それでいて子供等こどもらとは進んで善く遊んだから、大層生徒に人気のある教師だった。

それも、今となつてはただの優越感に根差した幻想に過ぎなかつたように思う。

云つてみれば一種の現実逃避だ。

考えてみれば幼い生徒達が己より無知で無力なのは当たり前のこと、彼等と仲良く出来たのは自分が圧倒的に勝つていと云う慢心から来る余裕があつたからに外ほかならない。にも拘からず叱しかることをしなかつたのは、もしかしたらその慢心すらも妄想に過ぎぬと云う可能性——自分は子供を叱れるような覚者か者くではなく、子供等より更に劣つた人間であると云う可能性——を、生徒との關係から若干なりとも嗅ぎ取つていたからに外ならない。

それは、正にその通りだった。

無邪氣と云う凶器は実に容赦がない。

——あの日。

あの日、幼い子等は杉浦に群がるようにして遊んでいた。耳を突くような喧声けんせいが右へ左へと忙まわしく移動し、視線を向ける至るところに愛らしい笑顔があった。

最初に杉浦の頸くびにぶら下がったのはどの子だったのだろうか。勿論もちろんその程度のことをされたところで杉浦は愛想あいさつ良く、まるで馬鹿のように笑っていた。

子等は増長ぞうちようした。

次々と杉浦の頸に可愛らしい掌てのひらが飛び付いた。とても重かったし、やけに痛かったのだが、それでも杉浦はまだへらへらと笑っていた。

子等は更に増長した。

苦しくなった。放すまいとする子供の細い指が頸に食い込んだ。放せ、と云う高圧的な台詞せりふはどうしても云えなかった。のみならず、そのうち声すらも出せなくなった。

杉浦は子等を振り解ほどこうと弱弱しい反抗しほらを暫しばらく続けた。

しかし、そんな迂遠うげんな抵抗が昂奮きやうふんした幼子わなきに通じる訳もない。止せ、止めろ——それは、笑い乍らさか口にする台詞ではない。

勿論通じなかった。

——通じない。

自分に纏わり付いている小さな生き物達には、自分の言葉は通じない。そこに至って杉浦の中にいきなり、どこか爆発的な感情の発露はつろがあった。杉浦は乱暴に身体を揺ると、臆躁ヒステリック的な奇声を上げ子供達を振り飛ばした。

飛ばされた子供達が悲鳴を上げた。

——拙ちぢい。

——怪我をさせたか。

杉浦は咄嗟とつさに社会人としての理性を取り戻した。子供相手にむきになって、乱暴を働いて、もし怪我でも負わせたりしたなら、その時はどんな云い訳も利かぬ——。

だがその懸念けんねんもほんの一瞬のことだった。

子供達は更に躍起やつぎになって杉浦に集たがつた。彼等の発した声は悲鳴ではなく歡喜の声だったのである。にこにここと樂しげに笑い乍はなら、小さな異人達はその紅葉もみぢのような手を翳かざし、杉浦ににじり寄よつて来た。

ぞつとした。

一度堰せきを切つた恐怖は次次と溢あふれ出した。

杉浦には、既に子供達こどもたちが人間に見えなくなつて来た。だからまるで穢けがらわしいモノを祓はらうかの如く必死でそれを払い除けた。しかしそうした行為は、單なる遊びの延長の劇ひょうげん輕な舞踏としてしか彼等の目には映らなかつたようである。

普段叱たとえることをしない親しみ深い教員の反応は、飯令たとえどれ程常態と違つていようと、高揚した子等こどもたちに對して何の抑止力も持ち得なかつたのだ。杉浦が最早真顔まへまへになつてゐるにも拘かからず、その声が恐怖に裏返うらつてゐるにも拘かからず、そんな徹てい徹ていたる變化に氣が行く者は誰一人としていなかつたのだつた。

結局——。

社会的自制心は次次溢れ出る個人的恐怖に打ち勝つことが出来なかつた。杉浦は数人の子供を突き飛ばし、そのうちの多分たぶん二三人は殴つた。

そこに至つて小さな異人達も流石さすがに温厚な教師の異変に氣づき、そしてそれはあつと云う間に伝染した。即座に——子供達の殆ど全員が杉浦を敵と判断した。

だが子供の目に敵意が芽生えたことで杉浦はやや安心した。それがどんな形であつたにしろ、己の意志が伝達出来たからである。

しかしその安心も数秒と保たなかつた。

油断した杉浦に、白い、小さな手が差し延べられ、杉浦はそれを謝罪の、あるいは和解のサインと受け取つた。しかしそれは、それを受け入れるべく蹲くゞんだ杉浦の——。

頸に素早く取り付いたのであつた。

その子は笑つていた。

声が出なかつた。



子供と雖もそれなりに力は強い。息が詰まって頭に血が上り、気が遠くなった。一瞬の情勢の逆転は泣いて怯えていた他の子等にもすぐに伝播し、杉浦は再び多くの小さな手に依る追撃を受けることになった。最初の時とは違い、それは明確に杉浦を敵と定めた攻撃だった。しかも圧倒的優位に立っていると云う余裕の下の攻撃である。

死ぬと思った。だから本気で、全力でそれを振り払い、大声で吠えて、目茶苦茶に暴れた。そしてそのまま走ってそこを脱出した。

今思えば、杉浦の執った行動は幾ら何でも非常識である。生徒達が遊びに夢中になった揚げ句、巫山戯て教師を扼殺したなどと云う馬鹿げた事件は古今東西聞いたことがない。ある訳もない。いや、そんなことはその時の杉浦にだって充分に解っていた。

——そう云うことじゃない。

そう云うことではなかった。

それからのことは善く解らない。

後で聞いた話だと、軽い怪我をした子供が三人程あったそうである。大立ち回りの割りに被害は少なかったのだ。杉浦は思った程暴れていなかったらしい。それとも大の男が全力で暴れたところで、あんな無鉄砲な暴れ方をしたのでは敏捷な子供達に打撃を与えることなどそもそも出来ぬのかもしれない。

何だか無性に厭になつて三日寝込んだ。

そんなことを仕出かした理由を問われても巧く答えることは難しい。責任を取れと云われても困る。だいたい生徒との力関係を旧来のそれに修復するとは難しいように思えた。

無論子供等はずぐに許してくれただろう。杉浦の執った行動は、それこそ子供染みたものであったろう。つまり彼等の論理で考えるなら、そう不可解な行動ではないのである。しかし問題は杉浦自身にあった。絶対優位の立場が揺らいでしまった以上、従来のように彼等と接することは出来ない——杉浦はそう確信した。